

子どもたちに担い手につながる道を開きたい……

「サトウキビの皮をむいて汁を飲んだらとってもおいしかったです」

沖縄県名護市で、保育園・幼稚園・小学校の子どもたちを対象に教育ファーム活動をつづけるJAおきなわ北部地区営農振興センター。農業離れが目立つ沖縄で、子どものうちから農業に親しんでもらいその子どもたちが担い手となる道を拓きたいという思いを受けて、沖縄県特産のサトウキビから製造する「黒糖づくり」では、子どもも親も、たくさんのことを学んでいく。

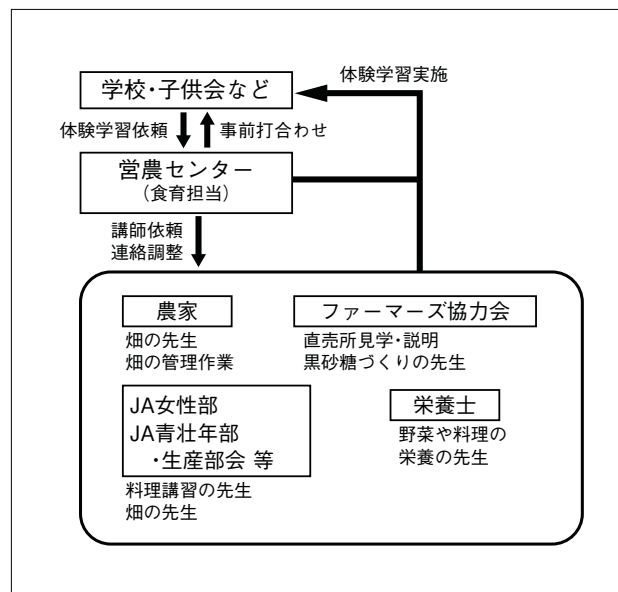
JAおきなわ北部地区営農振興センター

取組主体

- 名称：JAおきなわ北部地区営農振興センター
- 担当窓口
担当課(者)：JAおきなわ北部地区営農振興センター
営農総合部 部長 玉里 政志
営農総合部 専任 大宜見 盛志
住所：沖縄県名護市伊差川327-1
電話：0980-54-0015 FAX：0980-52-0396
- 団体等の属性：農林漁業に関する団体
- 構成員数：163人
- 連携団体及び協力団体
属性：農林漁業者、営農センター、農林漁業に関する団体、JA青壮年部、学校(小学校)、栄養士
内訳：農家、JA女性部、ファーマーズ協会、栄養士、学校、子供会



親子仲良くサツマイモの収穫



取組地域及び地域の特徴

取組地域：沖縄県名護市

地域の特徴：

本地区は沖縄本島北部に位置し、サトウキビ、パインを中心に花卉、畜産、柑橘、他に水稲、お茶等の多品目の生産が行なわれている。また、生産者が「地産地消」の取組みを図り、農産物直売所(ファーマーズマーケット)も販売高が伸長している。多品目の生産と農産物直売所もあるので、農業体験学習には恵まれている地域である。

取組内容

(1)目的(目標)

(取組みの目的)

- ・食育の一貫として食農教育(農業体験学習)を推進し、小学生児童、幼稚園児、保育園児、学童等を対象に、農作物の植え付けから収穫まで、働く喜びとつくる喜びを体験させる。また、農業体験学習を通じて助け合う豊かな心を育てるとともに、親子との絆を深める。

(年間の数値目標)

平成22年度活動計画(※教育ファームに該当しないものも含む)

1. サトウキビ刈り及び黒糖づくり体験学習：350名
2. 豆腐づくり体験学習：30名
3. 稲刈り体験学習等：120名
4. 野菜収穫体験学習等：150名
5. ジャガイモ収穫体験学習・料理会食：200名
6. サツマイモ収穫体験学習・料理会食：150名
7. 料理教室：25名
8. お茶摘み、お茶づくり体験学習及び茶道教室：30名
9. パインアップル収穫体験学習及び農産加工施設の見学：200名
10. 肉牛農家での管理作業体験学習：29名
11. スイートコーン収穫体験学習：100名

(2)取組開始時期・経緯

(取組みの開始時期)

- ・平成18年から準備をすすめ、遊休農地1400坪を整地し、農業用水、トイレ等を完備したJA農業体験農園「古我知農園」を開設し、農業体験学習の取組みを平成19年より本格実施した。

(取組みを始めたきっかけ)

- ・取組開始当時のJAおきなわ北部地区本部長が、沖縄は農業離れが目立つので、子どもたちに農業に親んでもらいその子どもたちが担い手となる道を拓きたいという思いを持っており、平成17年の食育基本法の制定を機に、食育の一環として食農教育(農業体験学習)を位置づけて推進していくこととし、JAおきなわ北部地区営農振興センターに2名の専任部署を設置して、率先して取り組むことにしたものである。

(3)対象作物

米、野菜、その他

作物名・種類：ジャガイモ、サツマイモ、サトウキビ、水稻

選定理由：毎年、北部地区営農振興センター内の会議で食農教育農業体験学習事業計画を定める際に、対象作物及び実施期間等、年度計画及び予算をまとめているが、対象作物として「沖縄県の独自のものを」という要請から沖縄県特産のサトウキビから製造する「黒糖づくり」、同じく特産のパインアップル、また、北部地域では古くから栽培の多い水稻を、加えて子どもたちに人気が高く土に触れる体験をしてもらうことも考慮してサツマイモ及びジャガイモを中心に対象作物を設定している。



1本ずつサトウキビの収穫

(4) 具体的な取組内容

(ほ場での指導概要)

- ・生産者の指導のもと、協力組織がサポーター役を務め実施している。指導する生産者は、生産部会が選任し、サポーター役をJA青壮年部及び女性部、生産部会(生産者)、農林年金連盟、JAのOB、県農業改良普及員等が連携して行なっている。

(指導に当たっての重点事項)

- ・農業体験学習に参加する子どもたちには、安全面に気をつけるよう、作物を大切に扱うよう指導者から作業前に説明するとともに、何かあった場合は、サポーター役も対応するようにしている。

(生産者以外の指導の関わり)

- ・協力組織に所属する多くのサポーター役がおり、充実した支援体制をとっている。JAのOBやJA女性部等お互いに関係があるので支援要請に対して応えてもらいやすい。また、子どもたちの要望により食育専門の名桜大学の先生に来てもらうこともある。

(指導者1人当たりの生徒数)

- ・参加人数や対象作物の作業工程数に応じた指導者数及び補助者数を検討・選定し、協力組織に支援を依頼している。指導者1人当たりの参加者数等の画一的な基準は設けてない。

(地域との関わり)

- ・北部地区営農振興センターが中心となり、JAおきなわ北部地区本部の各組織並びに年金受給者連盟、JAOB会及び沖縄県北部農林水産振興センター(農業改良普及課)などを協力組織として連携している。また、参加団体の北部地域の小学校等(小学校・幼稚園・保育園)には、体験学習の実施に向けた調整(対象作物、学習内容、日程、参加対象、安全対策、注意事項など)を複数回行ない、万全を期している。
- ・取組みは北部地区営農振興センターの専任2名が中心となっており、コーディネーターは設置していない。

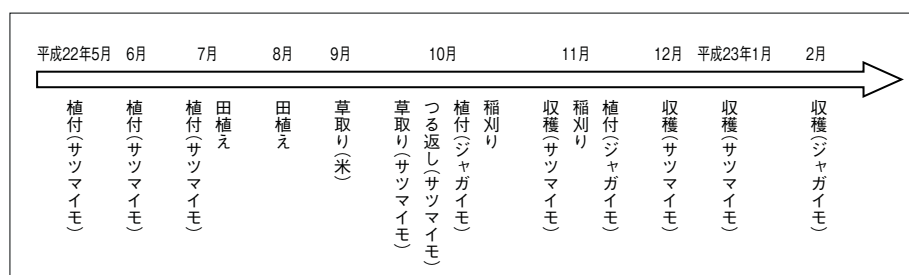
(連携している団体等との連携方法)

- ・当センターが実施する農業体験学習年度計画(対象作物、実施時期等)について、北部地域のできるだけ多くの小学校・幼稚園・保育園等に出向いて、農業体験学習の取組みを促進している。当センターの農業体験学習の取組みは、地域でもかなり周知されていて、各小学校等からの問い合わせが多く、希望してきた小学校等と具体的な調整(対象作物、実施時期等)をしていく。また、小学校等との調整においては、当センターが作成した企画書をもとに検討するとともに、小学校等の要望(調理実習も入れてほしい等)も踏まえつつ、JA女性部、青壮年部、生産者等との調整を図っている。

(参加者の参集方法)

- ・対象とする学年、人数等(父母・先生含む)について、小学校等が検討し、当センターと調整を行なう。なお、当センターは対象人数を確認し、指導する生産者(当該の生産部会)、サポーター役(JA等の組織)との役割分担等調整を行なう。
- ・公募は実施していない。なお実施した活動内容については、広報誌(『あじまあ』)に掲載している。また、県内外各紙で取り上げられている。

(5) 年間スケジュール



(6) 参加者数(のべ)・属性の実績及び推移

平成19年

【ジャガイモ】羽地小学校1年生、他273名

平成20年

【米】屋部小学校5年生、他105名、JAおきなわ糸満支店(親子) 109名

【ジャガイモ】久辺小学校3年生、他96名

平成21年

【米】JAおきなわ糸満支店(親子) 206名、JAおきなわ小禄支店(親子) 83名

久保田自治会93名、北丘小学校4～6年生179名

【ジャガイモ】羽地幼稚園、他151名、名護幼稚園、他209名

【サツマイモ】羽地幼稚園、他176名、宜野座幼稚園、他228名

【サトウキビ】屋我地小学校5年生、他78名

(7) 経費

(年間経費)

・おおむね250万円(平成21年度実績)

(主な支出科目)

・打合せの費用、体験学習をするほ場の管理費(肥料、農薬)やバスの運転手の手当等

(参加者負担と、その額)

・対象作物や体験させる作業工程数によって異なる。500円～200円/世帯。ちなみに平成21年度の参加者負担の総額は62万円であった。

(行政からの補助金等)

・行政からの補助金はない(JAバンクからの助成金あり)。



サトウキビを搾り黒糖づくり

課題及び対処方法(ポイント・工夫)等

●関係者(団体)との連携の経緯

・JAのOBやJA女性部・青壮年部とのつながりがある関係者と連携を図り、取組みを開始した。その後この活動をいろいろな人に知ってもらうことにより協力者の輪が広がっていった。

●連携するに当たって、課題となったこと

・取組みを知られていないときは支援を取りつけるのに苦労したので、PRが大切なことを実感した。
 ・小学校等及び協力組織との調整は多いものの、協力組織との連携態勢がしっかりしているので、現在調整については順調に行なわれている。

●課題の対処方法のポイントや工夫

- ・PRをして活動のことを知ってもらうこと。
- ・農業体験学習を受け入れる小学校等との調整については、生徒等の安全面を重視する点からも、これまでどおり綿密な調整が必要である。

●ほ場での運営の課題

- ・子どもたちにもっと興味を持たせるようなことを工夫したい(わかりやすい言葉づかい等)。
- ・運営人員の確保。
- ・ほ場の整備や管理用農機具の確保。

●ほ場での安全管理について

- ・作業に適した服装、帽子、靴等、小学校等の担任へ事前に準備するよう注意をしている。クワやカマ等の農具の使い方や注意すべき点等、始める前に説明を欠かさないこととしている。ヘビやムカデ等の危害生物についても、見つけたら手を触れずに指導者等に声かけするように注意を欠かさないようにしている。

これまでの成果

(取組みの効果：教師、父母からの反応)

- ・ジャガイモの栽培学習を通して、他の野菜への関心が芽ばえた。
- ・野菜や農家への感謝の気持ちが芽ばえた。
- ・子どもの偏食の解消(野菜嫌いな児童が好んで食べるようになった)。
- ・身近な食に関心を持つことができた。

(取組みの効果：子どもたちの反応)

- ・農家の苦勞を知った。
- ・食べものの大切さを知った。
- ・農業に関心を持つことができた。

今後の構想、課題

(取組みを実施する上での課題)

- ・小学校に農業体験学習の受け入れを呼びかけた場合、授業時間に実施しているので、体験作業を最後までできない場合がある。センターの農業体験学習の取組みは、地域や地域以外にも知られ理解もされているが、JAにおいても、経費節減が言われているなか、今後も予算確保ができるか不透明である。

(課題を踏まえて、今後どのような取組みを展開していくのか)

- ・食農教育が、将来の農業の基盤づくりの一助(担い手の育成等)となる重要な取組みであることを踏まえ、農業体験学習の必要性について、併せて、この取組みが北部地域の地産地消の促進等地域の活力向上にもつながるものである旨の説明や働きかけを行ない、この取組みに対するJAの本店や地域の理解を醸成し支援を得られるようにしたい。

JAおきなわ北部地区営農振興センター

みんなのコメント集

参加者

子どもたち

「僕たちは、ジャガイモ先生からいろいろ習いました。今、僕たちが楽しみにしているのは収穫作業です。カレーをつくったりするからです。自分たちでつくったジャガイモはとてもおいしいと思います」

「いろいろなことがわかりました。穴も掘りました。草取りもやりました。ミミズもたくさんいました。汗びっしょりで手は土だらけでした。芋の種を踏まないようにしました」

「サトウキビの収穫をしました。一人でやっていたら仲本さん(指導者)が“上手よ”といってくれたのでパワーをもらいました」

「サトウキビの皮をむいて汁を飲んだらとってもおいしかったです」

「(イモ)つるを刈り始めて、5分くらいですぐに腰が痛くなりました。これを毎日やっているのはすごいと思いました。僕だったらすぐに逃げていたかもしれません。料理も最高においしかったです」

先生、保護者

「何気なく食べていた黒糖が、多くの過程や、いろいろな人たちの苦勞からできたものだと改めて実感しました。子どもたちも黒糖のすばらしさを感じることができたと思います」

「指導者の方から、労働の大切さや要領のいい作業の仕方を教わり、働く(農業の)楽しさや大切さを学ぶ場となりました」

「サトウキビを見たことがない、収穫したことがない、サトウキビをかじったことがない、今の子どもたちのなかでサトウキビは本のなかの物でしかありませんでした。体験学習後の親子の会話も持て、より深いものになったと思います」



石うすを使って大豆をすりつぶして豆腐づくり